

市場の無規律性と貨幣の拡散*

— マルクス貨幣蓄蔵論の可能性 —

小幡 道昭

目次

1	「商業の普遍的用具」と「本源的購買貨幣」	1
2	労働貨幣論批判	2
3	貨幣数量説批判	3
4	貨幣蓄蔵の諸契機	5
5	富の領域と貨幣蓄蔵	6
6	貨幣蓄蔵と市場の無規律性	7
7	貨幣の拡散と資本	9

1 「商業の普遍的用具」と「本源的購買貨幣」

およそ貨幣をめぐる考察は、経済学が学問として確立されるはるか以前から、すでに多様な問題関心に基づいてさまざまな角度から進められてきた。その意味で経済学の貨幣論は、決して貨幣に関する唯一の考察をなすものではなく、あくまでもその特殊な一分枝たるにすぎない。しかしこのことはまた、経済学における貨幣の研究が、他の学問諸領域との総合をまっぴらしてはじめて可能になるということを意味するわけではない。経済学的な貨幣の把握は、ひとまずそれ自体で閉じた系をなすのであり、他の諸学との関連もこの自足的な系とその外部という観点から、改めて整理する必要があるのである。

こうした経済学特有の貨幣認識は、重商主義的貨幣観を批判する立場から、古典派経済学の発展とともに培われてきたものとみてよいであろう。そして、この古典派経済学の全面的・体系的な批判を通して自己の経済学体系を構築せんとしたマルクス貨幣論の独自性も、この古典派貨幣論との関連を抜きにしては理解しがたい面をもつ。そこでここではまず、マルクス貨幣論の固有の課題を背後から探る意味で、古典派貨幣論の特徴を概括することからはじめることにしたい。

古典派的な貨幣論の特徴は、すでにアダム・スミスの次のよ

うな二層的规定のうちに端的に示されている。スミスは『諸国民の富』の冒頭において、分業の意義とそれをひきおこす原理を説き、この分業は市場の広さによって制限される点を明らかにしたのち、このような観点からまず貨幣の起源および使用についての考察を試みる（第一篇第四章）。こうした側面からすれば、貨幣は物々交換の狭阻な限界を打ち破り、広範な分業関係を内包した「商業社会」を樹立するうえで不可欠の前提をなすものと見なされることになる。そしてまた、この限りでは貨幣は直接的交換の不便を避けるために自然に考え出された「商業や交換の共通の用具」（WN p.25, 訳(1)一三五頁¹⁾であるとされ、金属の衡量や試金の困難を解決するための铸貨制度の確立を含めて、「すべての文明国民の商業の普遍的用具」（WN p.29, 訳(1)一四六頁）として位置づけられることになる。

だがスミスは、単にこうした流通の技術的手段として貨幣を捉えるだけではなく、同時にその背後に「本源的購買貨幣」という特異な貨幣認識を有していた（第一篇第五章）。すなわち、現実には「貨幣または財貨で買われるものは、われわれが自分自身の肉体を労苦させることによって獲得できるのとちょうど同じだけの労働によって購買されるのである。実に貨幣または財貨は、この労苦をわれわれからはぶいてくれる」のであり、この意味で「労働こそは、つまりいっさいの物に支払われた本源的な購買貨幣 (original Purchase money) であった」（WN,P.32, 訳(1)一五一頁）というのである。むろん諸商品は

* 『思想』1981年

実際には、金属貨幣によってその価値を尺度されることになるのであるが、それはあくまでも異なる種類の労働の評価が困難であったり、さらにはまた労働の量なるものがそもそも大部分の人にとって触知し難い、抽象的な観念であったりするためにすぎないのだと説明される。この意味でスミスの場合、貨幣の本質は、実質的尺度の機能を果たす労働に結び付けられて理解され、現実の交換はこの本源的な購買によって規制される現象と考えられていたとみることができよう。以上のように、一見したところ技術的なものと究極的なものとが奇妙に混交してみえるスミスの貨幣の把握は、もちろん金属貨幣を富の唯一の形態と捉える重商主義への批判という側圧をうけて展開されたものであり、その点では「商業の普遍的道具」という規定も「本源的購買貨幣」という把握と同じ狙いをもっているということができよう。だが、この側圧を除外してそれ自身取り出してみると、この両者のうちには必ずしも整合的とはいえず指向が潜んでいた。事実、スミスの貨幣論における二側面はその後、いわば古典派経済学の頭教と密教となって発展する素地をなしていたように思われる。

このうち、市場における実際の貨幣を専ら「普遍的用具」として捉える視角は、そのみが分離され独立に論じられると、いわゆる貨幣数量説への道を歩むことになる。すなわち、労働価値説は、基本的には貨幣に媒介された両端の一般商品どうしの交換関係を規制するものと見なされ、交換手段たる貨幣商品との売買関係を制約するものとは考えられなくなる。中間にたつ貨幣量で示される絶対価格がいかなる水準に決まろうと、始点と終点における一般商品どうしの交換比率を一定に保つことは可能なのであり、とりわけ貨幣で表される諸商品の市場価格の絶えざる変動を前にして、むしろ貨幣は一般商品間に存在する均衡的な自然価格の真のすがたを覆い隠すヴェールに見立てられることにもなる。いわば、手段としての貨幣商品との交換比率を規制する原理は、目的としての一般商品間の交換比率を規制する労働価値説と別建てにされ、貨幣数量説として骨化してゆく。古典派的視角からは、労働こそが価値の真の尺度であることが明らかにされればされるほど、貨幣の価値尺度機能のほうは表面的な現象として、そこから遊離せざるを得ないのである。こうして一九世紀初頭における地金論争から通貨論争を経て、基本的には通貨学派的な見地が公認され、一八四四年のピール条例においてこの数量説的立場は制度化されることになるのである。

これに対して、スミスの「本源的購買貨幣」という着想は、現実の金属貨幣を「労働貨幣」によって置き換えるべきであるというかたちで、体制批判の主張のうちに受け継がれていった。すなわち、イギリスにおける経済学の発達を背景にした社会主義の主張は、一方ですべての価値は投下労働に還元されるというリカードの命題をもって、利潤の源泉が労働者の支出する剰余労働にあるとする搾取理論を事実上基礎づけると同時に、他方では、しばしば過剰生産や価格の急騰に見舞われる現実の市場における困難を、労働生産物の本然から逸脱した不自然な貨幣のせいだと糾弾し、これをその本源的な形態である労働に密着させることで打開せんとする立場を鮮明にしてゆくのである。こうした論者は、単にイギリスの既存の制度に対する

批判にとどまらず、さらに海峡を越えて社会組織への主知主義的な理性の適用に実験の場を提供していたフランスへ大きな期待を寄せていた (Kr.S.156, 訳一〇三一四頁参照⁸⁾)。事実フランスにおけるブルードン派の社会主義者たちの中には、これに呼応するかのように、労働貨幣によって金属貨幣をおとしめ、ないしは逆にすべての商品を貨幣に昇格させ、平等主義の理念を貫徹し貴金属の特権を廃止することで、市場組織の真の合理性を回復せんとする発想が早くから育まれていたのである。

2 労働貨幣論批判

マルクスの貨幣論の眼目は、こうした重商主義批判という側圧を失ってスミス以降次第に分解しつつあった市場の合理性に対するイデオロギーを根底から批判することにあつたといえよう。しかし、マルクスの場合も、この分解過程にある両者への批判は、当初から必ずしも統一的に企てられていたわけではなく、そこにまた問題も残されていたのである。周知のように、マルクスはブルードン批判の書である一八四七年の『哲学の貧困』を一つのきっかけに本格的な経済学の研究に着手した経緯があり、『資本論』体系に結実する一連の経済学批判の直接の起点をなす一八五七／五八年の『経済学批判要綱』も、ブルードン派のアルフレッド・ダリモンがこの前年に公刊した『銀行改革論』に対する論評から起筆されている。この限りではマルクスの古典派経済学批判の出発点は、労働貨幣論批判から、進んで本源的購買貨幣の限界を衝く方向を軸にしていたといえよう。そして、そこには後の価値形態論に立脚した市場認識の原像がすでに宿されている点で、充分留意する必要があるのである。

では、この観点からするマルクスの批判の照準はどこに向けられていたのであろうか。それは、一言でいえば「流通用具の — 流通の組織の — 変更によって、現存の生産諸関係とそれに照応する分配諸関係を変革することができるのか?」「流通のそのような変形は、現存の生産諸関係とそれに立脚した社会諸関係に手をふれることなしに、これを企てることのできるであろうか?」(Gr., S.57, 訳 八一頁⁹⁾) という点にあつたといえよう。マルクスの批判の標的は、資本主義経済においては貨幣が — より正確に言えば資本が — 本質的な生産諸関係となり、市場と社会的生産とが嵌りあっている構造を看過し、「流通の組織」の改革のみを専ら追求める、あまりに機械的な理性の行使におかれていたのである。そして『要綱』では、労働貨幣の批判を通じ、次のような独自の認識が早くも明確にされることになる。すなわちマルクスは、価格と価値においては「たんに名目的なものが実質的・なものと区別されるばかりではない。つまり金銀で表された呼称によってだけではなく、価値はもろもろの運動の法則として現れるということによっても区別されるのである」と述べ、「自分自身の不断の不均等化」という、特有な運動を内包した無規律的な市場像を提示する (Gr.S.72 - 73, 訳一〇六頁、なお「不断の不均等化」については、S.82 訳一二三頁も参照のこと)。マルクスは、「商品に内在する貨幣性質」(Gr. S.81, 訳一二一頁)に着目することで獲

られたこうした市場理解に基づいて、グリモンらのいう中央銀行は、単に労働票券を発行するだけにとどまりえず、(1)商品にすでに物質化されている労働が真正なものであることを確認し、(2)社会的に必要な労働時間がどれだけにあたるのか、その標準を査定し、(3)さらに労働手段と労働そのものの社会的配分を調整するといった追加的な機能を担わねばならなくなるのであり、いわゆる労働銀行はけっきょく、「一般的な買い手と売り手であるばかりか、一般的な生産者」となって「専制的な生産の政府」「分配の管理者」に墮するか、あるいは「共同に労働する社会のために記帳をし、計算をする一部省」に転ずるかせざるを得ないのだと論駁するのである(Gr.S.88 - 89, 訳一三四頁⁽⁴⁾)。

こうした労働貨幣批判から、マルクスはさらに遡ってスミスの「本源的購買貨幣」に対して、次のような根本的な批判を投げかける。すなわち「アダム・スミスは、労働(労働時間)は、すべての商品がそれをもって買われる本源的な貨幣であると述べている。生産の行為を見ればこのことはあくまで正しい、だが「労働時間は、それ自体直接価値であるということは(この要請は、換言すれば、すべての商品が直接それ自身の価値であるべきだということと同じことになる)できない。まさにそのわけは、労働時間は事実上はつねにもろもろの特殊な生産物のかたちで(対象として)存在するほかないからである」(Gr.S.99, 訳一五三-五四頁)というのである。そして、貨幣の必然性を説く価値形態論的な考察の萌芽も、特殊な諸商品が「一般的な交換価値になるということから、交換価値が一つの特殊の商品になるということが起こってくる」というかたちで、「すべての商品の貨幣性質」を基礎に形成されてくる(Gr.S.98-99, 訳一五三頁)。その結果、私利の追求を動力とする個々人の自立した生産から出発する商品経済のもとでは、市場に媒介され「この自立したもろもろの生産は、それらの相互の諸関連によって事後的に(post festum)規定され、変容を被る」のであり、「労働の有機的組織」の存在する場合は異なり、生産の社会的性格も結果的に繰り返して指定されるほかないのだというのである(Gr. S.103, 訳一六〇頁)。こうして、私利のものが事後的に社会的なものに転じてゆく場として市場が位置づけられ、絶えざる不均衡を内包した市場の乱雑で無秩序な側面も、事後的な調整に不可欠の過程として評価されることになるのである。スミスのいう労働は、あくまでも「限定された生産物だけを買う特殊な貨幣」(Gr.S.102, 訳一六〇頁)であるにすぎず、もしその労働が直接に「一般的貨幣」たりうるとすれば、そこではスミスがいうような「労働の分割」(分業)にかかわって「労働の有機的組織」が予めできていなくてはならないはずであり(Gr. S. 103, 訳一六一頁)、そしてその場合には商品経済的に特殊な媒介もせいぜい二次的な意味しかもたぬことになる。これがブルードン派の主張の背後に潜むスミスの「本源的購買貨幣」に対して、当初マルクスが下した批判の核心であったといえよう⁽⁵⁾。

3 貨幣数量説批判

ところで、こうしたスミスの貨幣論と結び付いた労働貨幣論批判から出発しながら、マルクスの貨幣論はその後、貨幣数量説に対する批判を通じて彫琢されてゆくことになる。『要綱』から『資本論』にかけて古典派経済学批判が成熟するにつれ、マルクスに特有な市場の無規律性に関する認識は、一方で価値形態論の確立を基礎にさらに理論的に深化されながら、しかし他方では古典派経済学の頭教たる数量説批判が前面に押し出されてくることとの絡みにおいて、微妙な屈折を遂げるのである。マルクスはすでに『要綱』段階においても、たとえば先のグリモン批判のなかで「彼は、リカードの貨幣理論が、銀行は流通する銀行券の数量を統制し、流通手段の数量は物価を規制する — 反対に物価が流通手段の数量を規制する、云々であるのに — という前提が誤っていることのために完全に論破されたものになっていることを、無視している」(Gr.S.61, 訳八八頁)と関説していた。そこにはおそらく、リカード自身も参加しておこなわれた地金論争から、その後の通貨論争にかけての一連の論争が念頭におかれているのであろう。事実『経済学批判』においては、トゥックの『物価史』を暗に示唆しつつ、「過渡する貨幣が増減するから、価格が騰落するのではなく、価格が騰落するから、流通する貨幣が増減するのである。これはもともと重要な経済法則のひとつであり、商品価格の歴史によってくわしくこのことを説明したことは、おそらくリカード以後のイギリス経済学の唯一の功績をなすものである90」(Kr. S. 173, 訳一三四頁、なおS.243 - 45, 訳二四八~五〇頁も参照のこと)という見解が打ち出されていた。

では、このように高く評価された「経済法則」の妥当性は、マルクスの場合、どのような理論によって基礎づけられているのであろうか。おそらくそれは、投下労働価値説を貨幣商品を含む全商品に徹底化する方向を基本として進められようとしていたのではないかと思われる。すでに触れたように、古典派の研究の流れをみると、労働が価値の真の尺度である点が厳密に規定されるようになるに従って、逆に貨幣による現実の購買は本来の価値尺度とは遊離したものに見なされる傾向があった。この結果、たとえばリカードにおいては、一般商品の間の「相対的価値がその生産に投下された労働の相対量によって支配される(governed)」点こそが重要なのであり、これに対してこれら商品が、一〇〇〇ポンド対二〇〇〇ポンドと表現されようが一〇〇ポンド対二二〇〇ポンドと表現されようと、両者が一対二の比率を保ってさえいれば、自分の労働価値説にとっては、あとはどうでもよいのだと言明されることにもなる⁽⁶⁾。これに対してマルクスは、貨幣商品たる金こそ「一般的労働の直接の体化物」なのだという立場を鮮明にし(Kr.S.140, 訳七五頁、S.191, 訳一六五頁参照)、とりわけ一般商品は貨幣との交換においてまず、この一般的労働時間に基づいてその量的規定が明確にされるべきであると主張するのである。

しかし、このような数量説批判への傾斜は、二重の意味で問題をはらんでいた。すなわち、何よりもまず、このような批判は、放浪説批判自体として、すでにその基本的視角と論理構成

の点に少なからぬ困難を宿しているのである。マルクスの批判の基礎は、一般商品に留まらず、貨幣商品を含めた全体にあまねく社会的必要労働に対応した交換関係の必然性を押し広げてゆく点にあった。ところが、このための前提となるいわゆる労働価値説の論証方法自体のうちには、すでに指摘されているように⁽⁷⁾、根本的な難点が含まれているのである。労働価値説の積極的な論証は、冒頭商品論での抽象的な諸商品の交換関係の次元においてではなく、自然と人間との物質代謝の過程を踏まえ、この社会的生産の構造が市場における諸価格の運動に及ぼす規制作用を解明する方向において、はじめてその基礎を明らかにしようとするものといえよう。数量説の歎大の特徴は、社会的生産と市場とをそれぞれ独立に運動する領域として形式的に分離してしまう点にあった。この限界を明確にするためには、市場と社会的生産のそれぞれの特性に立ち入った分析を加え、各々の諸契機が互いに作用しあう局面を木目細かく究明してゆくことが不可欠となる。『資本論』体系は、こうした観点からする数量説批判を一面に内在させているのであるが、しかしこのことはあくまで体系全体を通じて可能なことなのであり、出発点の貨幣論の範囲のみにおいて達成しうることでないのである。

しかし問題はそれのみではない。い。そう深刻なのは、このように数量説批判とともに、マルクスの貨幣理解の特徴も微妙に屈折させられていった点である。名目説的な貨幣論全般に通じるものとして、数量説は市場における貨幣の諸機能のさまざまな分岐と統合の諸相を看過し、貨幣なるものを抽象的・一般的に想定する傾向をもつ。これに対して、マルクスの貨幣論は、まさにこの現実的な諸相を解明する視点を基本的には含みながら、この屈折の結果、それを充分には発展させえないままに終るのである。この点はとりあえず、次の二点において指摘できよう。

第一は、労働貨幣論批判において重要な役割を担っていた市場の無規律性の位置が、ある意味で後退することになった点である。『資本論』に至る道は、価値形態論を中心に市場の無規律性の考察の揚が整備される一方で、しかしまた数量説批判の立場から等労働量交換の想定がますます強く要請されるようになるという、いわば軋轢の過程でもあった。そして、この要請に基づく冒頭における価値の実体規定は、市場における無規律性の諸相をつぶさに分析してゆく径路を封じるという副作用をも。ていたのである。例えば、貨幣の第一の機能とされた価値尺度の規定においても、一方で「価格と価値量との量的な不一致の可能性、または価値量からの価格の偏差の可能性は、価格形態そのもののうちにある。このことは、決してこの形態の欠陥ではなく、むしろ逆に、この形態を、一つの生産様式の、すなわちそこでは規律がただ無規律性 (Regellosigkeit) の盲目的に作用する平均法則としてのみ貫かれるような生産様式の、適当な形態にする」(K., I, S.117, 訳(1) 一八五頁⁽⁸⁾) という的確な理解が示されながら、他方実際の価値尺度機能に関しては「諸商品の内在的な価値尺度の、すなわち労働時間の、必然的な現象形態である」(K., I, S.109, 訳(1) 一七一頁) というかたちで、等労働量交換への理念化が図られてゆ⁽⁹⁾。生産過程を支配する技術的な客観性と、市場自身の無規律的な性格との差異に着目し、この点から市場を社会的生産の単なる表層として捉

える数量説的立場を乗り越えてゆく方向も、あながち不可能とばかりはいえないように思われる。しかし、貨幣論の内部で完結した数量説批判を早急に試みようとしていたマルクスにとっては、こうした方向への展開はやはり与しえぬものだったのであろう。

第二に、数量説批判への重心移動と連動して、『要綱』段階における「貨幣の第三規定」(Gr. S. 143, 訳二三四頁以下)、とりわけその中心をなす「貨幣蓄蔵」の規定に微妙な影響が現れてくる。一般に古典派の貨幣論においては、「価値の尺度」ならびに「交換手段」としての機能が中心となり、重商主義批判を標榜する観点からして、蓄蔵貨幣に開してはせいぜい「交換手段」の準備として二義的、派生的な任務が与えられるにとどまっていた。これに対してマルクスは当初から、手段としての性格を強くもつ第一規定および第二規定とは独立に、何よりも「貨幣は自己目的として現れる」(Gr.S.142, 訳二三五頁) とする観点を明確にし、「富の普遍的物質的代表物としての貨幣」(Gr.S.143, 訳二三八頁) を貨幣の第三規定として重視したのである。しかし、『経済学批判』の段階になると、『要綱』では一応の論及はあるものの (Gr.S.124-25, 訳二〇〇～二〇一頁) 基本的には「特別の篇を応うけて、あとから補足すべきこと」(Gr.S.159, 訳二六九頁) として保留されていた [通貨の量] に関する考察が新たに割り込んでくる。それとともに「三 貨幣」の「a. 貨幣蓄蔵」では、まず導入部分で流通の「分裂の不断の過程」に発生する鑄貨準備金の規定が盛り込まれ (Kr.S.189, 訳一六二頁)、さらにこの項の終結部分では、かかる鑄貨準備金に対して「蓄蔵貨幣は、流通している貨幣の流入、排出の水路として現れ、その結果、流通そのものに直接必要とされる分量の貨幣だけが、つねに鑄貨として流通することになる」(Kr.S.198, 訳一七八頁) という説明が追加されることになる。そして、準備の契機を重視したこのような構成は、基本的には『資本論』にも受け継がれてゆくのである。こうした変化は、諸商品の価値が、貨幣商品たる金も含めて流通にはいる以前に、その生産過程において対象化された労働量によって基本的には決定されている点を強調し、この観点から数量説を批判しようとしたことの帰結であったといえよう。「商品流通の動揺」によって供給される商品量が変化した場合、いわゆる数量方程式において、調整作用を果たすのは諸価格ではなく、流通手段としての貨幣の量のほうであるという命題 (K., I, S.136-38, 訳(1) 二一七頁) は、当然この「たえまなく交替する振子的な運動」を支えるべき「蓄蔵貨幣貯水池」を緩衝として外部に要請することになるのである (Kr.S. 198, 訳一七八頁、K., I, S. 148, 訳(1) 二三四頁)。たしかにこれによってマルクスは、『要綱』段階の蓄蔵貨幣に残されていた曖昧な規定を清算してゆくことになる。そこでは例えば「貨幣の自立性は仮象にすぎない」という、それ自体としては重要な意味をもつ命題を基礎づけるに際して、「貨幣をその蓄積によって増大させること、つまり貨幣それ自体の量が貨幣の価値をはかる尺度であるとするところは、やはり誤りであることが、わかる。貨幣以外のもろもろの富が蓄積されるのでなければ、貨幣は、それが蓄積される度合いに比例して、自らもその価値をなくしていく。貨幣の増加として現れるものは、実際にその減少である」(Gr.S.157, 訳二

六四頁) という、一種の逆説が用いられていた。ここに述べられているのは、おそらく貨幣に対置された商品総量が一定に維持されたままで、貨幣のほうだけが一方的に増加すれば、物価が上昇し貨幣の購買力は下落するのであり、その結果貨幣量の増加は個々の貨幣片の価値下落によって相殺され、全休としてはなんらの蓄積にもなりえないのだという考え方であろう。だが、こうしたレトリックの背後には、実は貨幣の価値は流通のなかではじめて決まるとする数量説的観点が忍び込んでいるといつてよい。こうした矛盾した説明は、『資本論』に至る過程で、金そのものの価値が、その生産過程において対象化された労働によって、すでに決定されているという点が理論的に明確に宣言されるとともに (K.I.S.106 - 07, 訳 (1) 一六八頁)、自ずと廃棄されることになる。

しかしながら、それと同時に貨幣が「抽象的社会的な富」として自己目的的に追求される側面は、どちらかという資本主義社会に先行する歴史的諸社会に結び付けられ、資本主義経済に関しては流通手段としての機能に対する補足的機能が商品経済を鳥瞰する観点から重視されるようになる。しかしこのように蓄蔵貨幣という変数に、局所的には「社会的な力が個人の個人的な力になる」のを促す「外的な物」(K.I.S.146, 訳 (1) 二三二頁) という規定を結合しながら、大域的には「蓄蔵貨幣貯水池」という位を代入するのでは、全体として貨幣のうちから流通形態としての資本を展望することはますます困難となる。第一の点で触れた厳密な意味での等労働員交換を想定する批判の視角が、流通の内部からは剰余価値は生まれないというかたちで、「貨幣の資本への転化」を直接に生産によって基礎づける展開を要請したとすれば、第二の視角は流通そのものの内部にかかる転化の動因が潜んでいる点を見失わせるという限界をもたらすことになったといえよう。

4 貨幣蓄蔵の諸契機

さてわれわれはこれまで古典派貨幣論批判の推移を軸に、マルクス貨幣論の特徴を概括してきた。ここではやや角度を変えて、マルクスが消極化させていった市場の無規律性という観点から、「抽象的社会的な富」としての貨幣を展望した場合、何が見えてくるのか、とくに貨幣蓄蔵に焦点を当てながら、マルクス貨幣論に秘められた可能性のほうを明らかにしてゆくことにしたい。すでにみてきたように、マルクスの古典派貨幣論批判は、貨幣の第三規定ないし貨幣としての「貨幣」、とりわけその中心をなす貨幣蓄蔵の対置を通して明瞭な外観を具えることになる。しかしその実際の規定内容は、「金銀は、非流通手段として貨幣になる」(Kr.S.191, 訳一六五頁, S.199, 訳一八〇頁参照) というように、第一義的には古典派的な貨幣理解のいわば補集合として与えられているにとどまる。もとよりこの否定形は、流通手段と無関係だという意味ではなく、「否定的な関連」の存在を含意しているのではあるが、ともかくその出発点が、あたかも無意識なるものの存在を意識との対比で察知するかの如く、いわば流通手段以外のものという否定形によって押さえられているがために、マルクスの「貨幣」の規定内容のうちには、実際にはいくつかの側面が複雑に絡み合って存在し

ている。しかも、これらの諸側面は個々ばらばらに切り離して把握しうるものではなく、各側面がそれぞれ他の側面を想定しあう関係にあり、その意味で単なる要素というよりも、まさに契機と呼ぶに相応しい性質を具えている。マルクスが「非流通手段」という否定形の規定を敢えておこなった狙いも、おそらくかかる契機としての側面を重視したからではなかったかと推察される⁽¹⁹⁾。こうした点を踏まえたうえで、貨幣蓄蔵を支える諸契機を敢えて明示的に摘出してみると、およそ次のような三つに集約できるように思われる。

第一は、購買のための予備ないし準備という契機である。すでに A・スミスも、物恋交換を可能ならしめる直接的欲望の一致という事態がきわめて偶然的にしか起こりえず、したがってこのような不便を道けるために、「分業が最初に確立された後、社会のあらゆる時代のあらゆる慎慮の人は、自分自身の労働の特有な生産物のほかに、あれこれの商品の一定量を、いつでも自分自身の手もとにもっているというようになしかたで、自分が当面する問題を処理しようと自然に努力したにちがいない」(WN,p.24-25, 訳 (1) 一三二頁) と述べ、交換手段としての規定のうちに事実上準備の要素を取り込んでいた。マルクスの場合、この準備としての契機は、『要綱』の段階ではほとんど表面にはでてこないのであるが、数量説批判の積極化にともなって、『経済学批判』では「a. 貨幣蓄蔵」の項の出発点に据えられることになる。すなわちここでは、先のスミスの説明を示唆しながら「売らずに買うことができるためには、かれは、買わずに売っていないなくてはならない。事実、流通 W—G—W は、販売と購買との過程的統一にすぎない、そのかぎりでは、流通はまた同時に、こうした分裂の不断の過程でもある。貨幣が鑄貨としてたえず流れるためには、鑄貨はたえず貨幣に凝結しなくてはならない。鑄貨のたえない通読の条件をなすものは、貨幣が、流通のなかのいたるところで発生しながら流通を制約する鑄貨準備金という形をとって、大なり少なりの割合でたえず停滞することであるが、この準備金の形成、配分、解消および再形成はつねに変化し、その定在はたえず消滅し、その消滅はたえず定在する」(Kr.S.189 - 90, 訳二八二頁) という説明が付加されるのである。『資本論』では、たしかに「鑄貨準備金」という表現こそなくなるものの、この規定自体はたとえば商品所有者の「欲望は絶えず更新され、絶えず他人の商品を買うことを命ずるが、彼自身の商品の生産と販売は、時間がかかり、また偶然によって左右される。彼は売ることなしに買うためには、まえて買って買うことなしに売っていないなくてはならない」(K.I.S.145, 訳 (1) 二三一頁) というかたちで、考えようによってはむしろ「貨幣蓄蔵」の項の中央に引き寄せられるといえなくもない。もっともマルクスにおいては「このような流通手段の貨幣への第一の転化は、貨幣通読そのものの単に技術的な要因をあらわしているだけ」(Kr. S. 190, 訳一六三頁) なのであり、その点で「蓄蔵貨幣を鑄貨準備金と混同してはならない。鑄貨準備金は、それ自身、つねに流通内にある貨幣総量の一部をなすものであるが、蓄蔵貨幣と流通手段とのあいだの能動的関係は、この貨幣総量の増減を前提するものである」(Kr.S.198, 訳一七八頁) というように、この準備としての契機は、基本的には貨幣数量説批判の展開にともなって貨幣総量の

調整機構という、鳥瞰的な視点から問題にされる。その点ではスミスのように交換の主体の観点からする準備機能の把握とはやや異なったものとなっており、このために主体的な動因を重視した、つづく貨幣蓄蔵の基本的契機との関連も、不明確にならざるを得ない面を残しているのである⁽¹¹⁾。

貨幣蓄蔵の第二の契機をなすのは、「抽象的社会的な富」の保有という側面である。マルクスは「富が自然に発生してくる最初の形態は、過剰または剰余という形態でり」(Kr.S.190, 訳一六三頁)、商品経済に媒介されこの「過剰物をその一般的形態でわがものにする」(Kr.S.192, 訳一六六頁)衝動が生じる結果、致富欲の「唯一の対象」として貨幣は自己目的的に固持されるようになるのだというのである。この富を貨幣と結び付ける観点こそ、古典派が不合理な旧弊と見なし、一貫して拒絶し続けたものだった。これに対して、市場による社会的生産の編成が結果的にいかに合理的なものとして実現されようとも、市場の基本的動力として、こうした個々の主体による貨幣の自己目的化が決して看過し得ぬものである点を再宣言してゆくところには、マルクスの古典派批判の真骨頂が示されているといつてよい。もっとも、マルクスの場合、この第二の契機においては、資本主義経済に先行する諸社会における市場を想定した説明が多用され、しかもこうした傾向は『資本論』において「貨幣蓄蔵」の項の記述が圧縮されるにつれていよいよ目だってくる⁽¹²⁾。もっともこうした歴史的観点を含んだ説明が、それ自体無意味だというのではない。こうした記述は、市場そのものが歴史的に変容する可能性を秘めた対象であることを理論的に明らかにするうえで、むしろ不可欠な基盤を装着する意義をもつといつてよい。重要なのは、そこから進んでこのように前資本主義的市場で鮮明なすがたをみせる、この蓄蔵の基本的契機が、資本主義的市場のなかでいかなる転生を遂げ、水面下の動力としてどのように埋め込まれてゆくのか、この点を理論的に追求することにあるといえよう。この転生から生じる連続海と断絶海の構造が明らかにならぬかぎり、この第二の契機を未開の遺物として斥けてきた古典派の貨幣理解の盲点を、真に衝くことにはなり得ないのである。

ところでマルクスの「貨幣蓄蔵」のうちには、以上のような基本的契機に加えて、さらに次のような第三の契機が伏在している。すなわち、「蓄蔵貨幣の直接的な形態と並んで、その美的な形態、金銀商品の所有がある」(K.,I.,S.197, 訳(1)二三五頁)とされ、「貨幣蓄蔵のもうひとつの形態」としての「蓄蔵貨幣の美的形態」の存在が論じられる(Kr.S.197, 訳一七五頁)。マルクスの場合、先に引用した蓄蔵貨幣と鑄貨準備金との混同を戒めた個所のすぐ後でも、「金や銀の製品は、すでにみたように、貴金属の排水路をなすと同時に、それを供給する潜在的な源泉をもなしている」(Kr.S.198, 訳一七八頁)というように、この美的形態は第二の契機のさらにその外側に、いま一つの自立した契機として想定されているように読めるのである。おそらくマルクスは、第二の契機があくまでも市場との関係において唯一の「抽象的社会的な富」たりうるのに対して、むしろ貴金属の素材の性質の故に欲求の対象とされる海を指摘したかったのであろう。金銀は元来商品経済の発展の有無とはひとまず独立に、マニアックな蒐集の対象とされてきた歴史があ

る。貨幣は、場合によっては価値尺度ないし交換手段として指定されるまえに、「歴史的に第三規定において現れることもありうる」(Gr. S.143, 訳二三七頁)という指摘も、商品経済の発達とは相対的に独立した「奢侈品、つまり金銀装飾品」としての美的形態が強く念頭におかれているものといつてよいであろう。こうした一種の奢侈は本来、商品経済的な価値の大きさとは独立に嗜好される面をもつのであり、その点でこの第三の契機は、商品経済とのつながり具合において、先の抽象的な富としての第二の契機とは一線を画するものとなるのである。そしてこのような第三の契機を弁別することによってまた、次のような興味深い指摘もはじめて可能となる。「富が増加するにつれて奢侈対象としての金銀の使用が増加するということがごく単純なことがらであるから、古代人もそのことはよく知っていた。ところが近代の経済学者たちは、金銀製品の使用は富の増加に比例して増加するのではなく、ただ貴金属の価値下落に比例する、という間違った命題をうちたてた」(Kr.S. 197, 訳一七六頁、なお Gr. S.101, 訳一五八頁も参照のこと)。ここにいう富は、単にもともと金銀の形態をとるとされてきた「抽象的社会的な富」だけではなく、さらに遡って社会的な純生産物ないし国民所得を構成する素材的富をも含意するものとみべきであろう。とすれば、貨幣蓄蔵の第三の契機は、貴金属が他の諸商品より相対的に安価になったためにより多く需要されるのではなく、むしろ社会的な所得の増大に応じて需要される点を強調し、これによって貨幣を一般商品と同格に扱う古典派の死角を衝く狙いをもっていると考えられる。しかも、この第三の契機を第二の契機から分かつ視座は、「抽象的一般的な富」としての貨幣がもつ単一性への指向を制限する作用を示唆する面を具えている点でも看過し得ない。マルクスは過剰としての富が、その一面に市場における特定の貨幣商品を貫通して、再び多様な形態を身に付けた装飾品に回帰する性質を残しているというのである。ここには、マルクスによる貴金属の位置づけとも密接に関連し、後にみるような貨幣の分裂要因が隠されている点で、等閑にできない問題が潜んでいるように思われるのである。

以上、われわれはマルクスの貨幣蓄蔵のうちに、事実上古典派にも意識されていた第一の契機と並んで、さらに第二、第三の不可視の契機へ透過せんとする視座が蔵されていることをみてきた。残された課題は、これら三者をまさに有機的に関連した諸契機として理解してゆくことにある。その際重要なのは、マルクスの貨幣把握が何よりも一旦商品論に下向し、「商品の貨幣性質」から展開されるべきものとして組み立てられていた点であろう。そこで、ここでは以上の三契機の横の関連を、商品論に遡航し縦の展開のうちに捉え返してみることにしよう。

5 富の領域と貨幣蓄蔵

マルクスは『要綱』から『資本論』にかけて、「商品の貨幣性質」を解明すべく、貨幣論に先行する商品論の拡充・深化を試みる。そこでも商品の二要因のうち、この「貨幣性質」を内包する価値に関しては、まず「非使用価値」(K.,I.,S.100, 訳(1)一五七頁)という否定形で捉える一面を有していた。マルクスは

これによって、第一義的には使用価値の異質性に對置する、同質性としての価値という規定を導き出したかったのであろう。しかし、それと同時にまた、そこには商品の使用価値を「他人のための使用価値」として特定化する独自の視点も提示されていた。この場合、「他人のため」ということの否定を通じてその裏に導出される価値の概念においては、自己の商品が他人の商品に対して交換を求める能力をもつという、能動的な性質が軸となろう。マルクスが商品の二要因を一方で「労働の二重性論」に対応させながら、他方で諸商品の交換を求める諸形態の発展のうちに貨幣形態の必然性を説く「価値形態論」を併せて展開した背景には、おそらく結果としての同質性とは区別される交換性としての価値概念の存在が強く作用していたように思われる。しかし、ここで貨幣蓄蔵の三つの契機を踏まえてもう一度「商品の貨幣性質」を振り返ってみるとき、先の「非使用価値」という否定形の規定内容を、単にこの交換性一般に還元することで果して充分であったかどうかという疑問が、改めて浮かんでくる。すなわち、先の三つの契機を「商品の貨幣性質」から説明するという場合、この貨幣性質をあまねく交換性に帰着させるのではなく、それとは区別される、さらにもう一つ別の性質を想定する必要があったのではないかと思われる。

この点に関してマルクスは、早くから交換性の背後に潜む過剰としての富に注目し、おそらくスミスより一世代前のW・ペティやボアギュバルを念頭におきながら(Kr.S.188, 訳一六〇頁)「貨幣とは、商品世界において富が拡散し分散していること(Ausbreitung und Zersplitterung)とは対照的な、簡潔な要約[kurzgefaßtes Compendium]としての一般的富なのである。特殊の商品においては、富は商品の一契機として現れる、いいかえれば商品が富の特殊な一契機として現れるが、これにたいして、金と銀においては、一般的な富それ自体が特殊の物質に集約されたものとして現れる」(Gr.S.145, 訳二四〇頁)という貨幣把握を示していた。商品を単に交換のための便宜的な用具として捉える古典派の限界を、このような富としての貨幣という観点から乗り越えようとするのであれば、おそらく出発点における商品の「非使用価値」の内容も、単なる交換性一般に限定するのではすまい。むしろ商品の価値概念のうちには、当然この交換性が一方の軸として据えられねばならないが、同時にまたそれが貨幣蓄蔵として外化するような契機と連合している点も看過すべきではない。マルクスは『資本論』の本論を「資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの『巨大な商品の集積』として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現れる」(K., I.S.49, 訳(1)七一頁)という一文で開始しているが、交換性に還元しがたい「商品の貨幣性質」というのは、おそらく自由に処分することのできる過剰ないし剰余としての、この富の側面に係わるものといえよう。こうして貨幣蓄蔵の観点から改めて捉え直すならば、「商品の貨幣性質」のうち、交換性が貨幣の価値尺度および流通手段としての機能に結実してゆく背後で、同時にこの富としての側面が貨幣蓄蔵の諸契機にどのように転生してゆくのかわという問題が伏在していることに想到するのである。

もっともこの点は、以上のように富の契機を冒頭の商品に埋め込む方向でしか、明らかにし得ないとばかりはいえぬかもし

れない。むしろ商品の価値概念を交換性に限定し、富とは商品範疇を圍繞する財一般の世界であるというほうが、一般には納得しやすいであろう。こう考えれば、交換性の発展を通して価値尺度および流通手段としての規定を洩らす貨幣によって単純流通がひとまず駆動され、次にこの流通世界がその外部の富の領域を席捲することで、貨幣の第三規定が与えられるといった展開が予想される。だがこのような貨幣蓄蔵の捉え方には、次のような難点がある。

第一に、このように商品世界から富の領域をひとまず排除したうえで、単純流通を導き出すかぎり、市場の無規律性の考察に十分な理論的基盤を与えてゆくことが困難になるという問題がある。諸所品の価格の運動は絶えざる不均等化の過程を内在させており、市場の範囲を充分広くとれば同種商品についてさえ、価格に変位が観察されるという市場の特性は、たしかに個々の主体の側の情報や知識の相違に左右される私的な判断や予想のズレに、直接には対応するものといつてよい。しかし、このような個別的な契機は、あくまで必要条件たりうるにすぎない。商品世界が単なる瞬間的な交換の平面ではなく、いわば余剰に立脚した一定の厚みをもった領域であり、富のもつ処分の自由度を取り込んで、ある期間を通じて取引をすればよいという留保を絶えず残していればこそ、個別主体の判断や予想が現実の価格の運動に対して実際に影響力を發揮することにもなる。すでにみたようにマルクスがブルードン批判を通じて明確にしていた市場の無規律性に対する認識を、理論の領域に汲み上げてゆくためには、端緒における商品世界が富の領域と無関係に想定されていたはならないのである⁽¹³⁾。

第二には、貨幣蓄蔵の契機を単純流通の富の領域への拡張として追加的に論じるのでは、貨幣蓄蔵を支える諸契機の間関連も明瞭にしにくくなるという問題がある。商品世界のだから貨幣が生成する過程においては、たしかに交換性に基づく価値尺度ならびに流通手段としての機能を体現する単一の貨幣への集中が鋭く進むことになろう。しかしそれは同時にまた、商品世界に内包されていた富の領域が、諸貨幣のうちに分化し再結合される過程でもある。そしてこのような富の領域の流動を理論の正面に据えるには、出発点における商品の範疇の外部に富の領域を設定するのでは明らかに不十分であると考えられるのである。

6 貨幣蓄蔵と市場の無規律性

以上のように貨幣蓄蔵の諸契機を「商品の貨幣性質」の自立したものとして縦に遡って捉えることは、同時にまた商品論の次元においてはなお未分化な状態にとどまっていた富の契機が、この自立化の過程を通じて貨幣のうちにどのように分化することになるのかを明らかにすることにつながる。そして、無規律的な市場との対応において、この根への分化を眺めてみると、商品の富としての性格のうちには、貨幣によるのではなお吸収し尽くし得ず、けっきょく資本という新たな形態に転化せざるを得ない契機が含まれていることにも気付くのである。そこで今度は、貨幣蓄蔵の諸契機を資本への発展という方向に延長して検討してみよう。

マルクスの場合、諸商品に拡散して存在していた富としての性格は、四でみたような三つの契機に分化しつつも、基本的には「非流通手段」としての「貨幣」のうちにことごとく集約されるものと考えられていた。このような理解は何に由来するのであろうか。マルクスの場合、この基礎には、次のような貨幣価値の安定性の認識が核たわっているように思われる。「対象化された労働時間としては、金自身の価値の大きさは保証されている。しかも金は、一般的な労働時間の休化物であるから、この金が交換価値としていつでも作用することが、流通過程によって保証されているのである。商品所有者が商品を交換価値の姿で確保できるという、つまり交換価値そのものを商品として確保できるという、単純な事実によって、商品金という転化された姿で収蔵する (zurückhalten) ためにこれを交換することが、流通の独自の動機となる」(Kr.S.191, 訳一六四 - 六五頁)⁽¹⁴⁾。ここでは金に関して、(1)「価値の大きさ」、および(2)「交換価値としていつでも作用するということ」、この両者がともに保証されているという点が、「形態転化が自己目的となる」ための根拠として挙げられている。たしかに、このうち第二の「保証」、すなわち金でならいつでもすべての商品に対して即座に交換を求めようという点は、まさに貨幣が蓄蔵される第一の契機、つまり購買のための準備という機能にとって決定的な意味をもとう。マルクスはツウックの「貨幣はいつでも商品を買うことができるが、ほかの商品は必ずしもつねに貨幣を買うことはできない」という一文を引用しているが(Kr.S.166, 訳一二三頁)、まさに市場がこのような構造をもっているからこそ、特定の貨幣のみが購買の即時的な準備としての役割を果たしうるわけである、とすればこれに加えて第一の「保証」が必要となるのは、おそらくこうした準備という契機を越えて、マルクスが「蓄蔵貨幣を鑄貨準備金と混同してはならない」としてあげた固有の意味における蓄蔵貨幣にとってだったのではないだろうか。「素材転換にかかわって、形態転換が自己目的になる」(Kr.S.191, 訳一六五頁) ためには、貨幣は単にいつでも買えるという出動の契機だけではなく、まさにその対象自体の価値の不変性という契機が必要であると考えられたのであろう。

だがマルクスは、その後この点に関してやや異なった見解を示すことになる。すなわち『資本論』においては「もちろん、貨幣の価値は変動する。それ自身の価値変動の結果であるにせよ、諸商品の価値変動の結果であるにせよ、しかし、このことは、一方では、相変わらず二〇〇オンスの金は一〇〇オンスの金よりも、三〇〇オンスは二〇〇オンスよりも大きな価値を含んでいるということを妨げるものではなく、他方では、この物の金属的現物形態がすべての商品の一般的等価形態であり、いっさいの人間労働の直接に社会的な化身であるということに妨げるものではない」(K.,I, S.147, 訳(1) 二三四頁) というように、貨幣に価値の変動があっても、貨幣蓄蔵の衝動は止むものではないとする立場が表明されるようになる。このうち「他方では」として述べられているのは、先の第二の「保証」とほぼ重なるのであり、その点からいうと、貨幣の価値変動にも係わらず自己目的的に貨幣が蓄蔵される積極的理由とされているのは、「一方では」として挙げられている内容のほうであると考えられる。しかし、ここで指摘されている点は、真に社会的

な富として貨幣が蓄蔵される理由になり得ているであろうか。たしかに、「貨幣蓄蔵の直接的な形態」と並ぶもう一つの「美的形態」という契機を持ち出してくれば、この「一方では」として述べられている内容も一応了解できなくはない。ただその場合には「価値の大きさ」に関わるのではなく、専ら二〇〇オンスの金は一〇〇オンスの金よりも重いという点だけが重要となる。しかし、マルクスの叙述の順序に従うかぎり、この説明は「美的形態」という第三の契機とはひとまず区別されて述べられたものなのである。そして、もしこれが貨幣蓄蔵の「直接的な形態」のみに関するものであるとすれば、マルクスによるここでの比較対象の設定のしかたには、論理的な難点があるように思われる。すなわち、マルクスが比較しているのは、同一時点における金どうしなのであるが、「金銀蓄蔵の増加は価値の増加である」といえるかどうかは、価値が低下する以前の一〇〇オンスの金と、低下後の二〇〇オンスの金との較量をまっはじめで確定できることであろう。金の価値が低下してゆくことがわかっているときに、あえてその金を蓄蔵せんとする動力がどうして湧出してくるのか、この点がマルクスの説明でははっきりしないのである。

事実マルクスも、シーニョアが支払手段機能という観点から貨幣の購買力の安定性を重視したことを批判するなかでは、「貴金属の価値低下がめだってきたのを考慮して、オックスフォード大学とケンブリッジ大学とにその地代の三分の一を小麦と麦芽で備蓄させるような法令」が通過したという事実に言及している(Kr.S.206, 訳一八八頁)⁽¹⁵⁾。ここで問題になっているのは、まさに貨幣の価値が変動することを認めた場合、端緒の商品に具わる富としての性格が単一の貨幣のもとにつねに集約されるかどうかという点である。市場が不断の価格変動を伴い、したがってそこにおける貨幣の購買力も決して不動のものとして保証されているわけではないとすれば、単一の貨幣が社会的な富の代表者として確固たる地位を維持し続けることも困難になろう。

この点で興味深いのは、マルクスによる貴金属の位置づけであろう。マルクスは早い時期から「貨幣関係の主体、貨幣関係の化身 [Incarnationen] としての金属の研究は、ブルードンの思っているように、経済学の領域の外にあるわけではけっしてない」(Gr.S.104, 訳一六四頁) と述べ、「表示するもの」と「表示されるもの」とが簡単に切断できぬ点に注意を促していた。そしてこの点は、『経済学批判』の段階になると、その第二章「貨幣または単純流通」の本論の「三 貨幣」の節の後に、さらに「四 貴金属」という節を添えるかたちで強調されることになる。ここでは「世界貨幣」におけるように、単に同じ金自身が纏う鑄貨形態と地金形態との違いが問題にされるだけではなく、さらに金と銀という異なった貨幣素材の存在が強く意識されているのである。たしかに『資本論』においては、この「貴金属」の節は消えるのであるが、しかし貨幣素材の複数性の認識そのものはなくなるわけではない。マルクスは第三章「貨幣または商品流通」の冒頭で「簡単にするために、本書ではどこでも金を貨幣商品として前提する」(K.,I, 109, 訳(1) 一七一頁) と一応断わりながら、しかしこの章の第三節「貨幣」では、「金銀蓄蔵」(Gold- und Silverschatze)、「金銀商品」(Gold- und

Silverwaren)、「金銀鑄貨」(Gold- und Silvernünze)という表現を多用するのである。こうした配慮のうちには、金貨幣が一般的な購買手段という規定を越えて、さらに一般的な富としての性格を単独で担い続けることがはたしてできるかどうかについて、ある種の躊躇がはたらいていたのではないかと推察される。マルクス自身はこの点をこれ以上積極的に論じようとはしないのであるが、市場の無規律性を重視する観点からすれば、この問題はさらに次のような方向に発展する可能性を秘めている。すなわち、商品世界に未分化の状態に胚胎されていた富の領域は、不断の価格変動を伴う市場に直面して、準備としての契機と、奢侈とも結び付いた購買力の保持という契機とに分岐するのであり、その結果この前者の契機が単一貨幣への集中を鋭角的に進めるのに反して、後者の契機はこの単一の貨幣によってはなお担いきれず、最後まで抽象的富としての性格を強く帯びた複数の貨幣的商品の存在を要請せざるを得ない側面を残すことになるのではないかと考えられるのである。マルクスが貨幣蓄蔵の規定をますます前資本主義的な性格において強調せざるを得なかったのも、かかる貨幣蓄蔵のもつ自己分裂的な性格の予兆と無関係ではなかったように思われるのである。

こうしてマルクスは、貨幣蓄蔵の基本的契機が資本主義経済のもとでは次第に後退することに注目することになるのであるが、ただその主たる原因とされているのは、直接には支払手段機能の発達なのである。すなわち、貨幣蓄蔵の縮減は「信用制度、したがってまたブルジョア的生産一般の成熟とともに、支払手段としての貨幣の機能が購買手段としての貨幣の機能を犠牲にして、またそれにもまして貨幣蓄蔵の要素としてのその機能を犠牲にして、拡張されるということは明かである」(Kr.S.205, 訳一八七頁)というように、貨幣の諸機能内部での横への振替りの問題として処理されてゆく。マルクスは、この支払のための準備金に関して「致富の手段としてみられた抽象的形態での貨幣蓄蔵は、ブルジョア的生産が発達するにつれて減少するの、交換過程によって直接必要とされるこの貨幣蓄蔵は増加する、というよりはむしろ、一般に商品流通の領域内で形成される貨幣蓄蔵の一部が、支払手段の準備金として吸収される」(Kr.S.208, 訳一九三頁)という見解を示すことになるのである。しかし、「致富の手段としてみられる抽象的形態での貨幣蓄蔵」が減少するのは、はたして支払準備金への振替りのせいだと言いつけるであろうか。こうした振替りが考えられるとすれば、それは「商品流通の領域内で形成される蓄蔵貨幣」、すなわち鑄貨準備金に関わるものであり、これとは区別されねばならぬとされた「致富の手段」としての貨幣蓄蔵の第二の契機が、代替されることになるとは考えがたいのである。

こうした反省にたってみると、むしろマルクスが「致富の手段」として捉えた側面は、けっき。く複数の貨幣商品によってもなお担いきれるものではなかったのではないかと思われてくる。それ自体無規律な変動を繰り返す市場に直面して、単なる即時的な購買力の準備としてではなく、自由に処分できる余剰としての富を商品経済との関連において保持するという行為は、けっき太くあるときには金を、またあるときには別の特定の商品と、といったかたちで、富の素材を絶えず変えてゆくことを要請することになるのではないだろうか。すでにマルクス

は「価値としての自己に固執する価値にとっては、増大することは、自己を維持することと一致する」(Gr.S.194, 訳三二〇頁)と述べ、貨幣蓄蔵の基本的契機とされていたものが、けっき太く資本の運動に転化せざるを得ないものである点を早くから示唆していた。もとよりこうした運動が、常に実際の増大を結果する保証はない。しかし、絶えざる変動を伴う市場とのつながりを断つことなく、しかも富の保持を図るということ自体、すでに貨幣商品たる金を含めて、いずれか特定の素材にしがみつくとでは所詮無理なのである。資本主義経済の発展とともに、固有の意味での蓄蔵貨幣が減少するとすれば、単に貨幣の諸機能間の振替りの問題にとどまるのではなく、まさにこうした資本の運動の積極化のうちにこそ、その根因が縦に探求されるべきだったといえよう。

7 貨幣の拡散と資本

さてわれわれはこれまで「貨幣蓄蔵」を中心に、マルクス貨幣論に秘められた可能性を追求してきた。そしてこれを通じて、およそ次のような貨幣に対する独自の捉え方を読み取り得たのではないかと考える。すなわち、まず留意すべきは、貨幣を商品論の次元まで遡り、「商品の貨幣性質」の分化した存在として捉え返す場合、この「貨幣性質」の内容が実はすでに二つの側面を内包しているという点である。たしかに、商品世界のなかから貨幣が自立する際の直接的な起動力は、その使用価値が商品所有者の直接的欲求を満たし得ないがために、他の商品との交換を求めるとなるという性質にあるといつてよい。しかしこのような交換性は、商品がそもそも素材的な富であるとされたことに示される、本源的な過剰性を全面的に体現するものではない。その結果、交換性に領導されて、特殊な商品たる金が貨幣の地位を占めるようになり、他の諸商品が一定量の金を意味する価格によって一律にその交換性を表現する一方で、交換性の外部に未分化の状態に広がる過剰性にも独自の分岐が生じるようになる。貨幣蓄蔵の諸契機は、過剰性一般の地平上に交換性が屹立する過程で発現したものとみることができよう。すなわちこの過程においては、交換性に引き寄せられるかたちで、過剰性のうちから、予備としての側面が鑄貨準備金として分離することになる。市場における諸商品の価格が不断に変動するとすればそれだけ、不測の事態に備えて、いつでも出動可能な即時的な購買力の準備を追加的にもつ必要もますます高まるのであるが、この部分は価値尺度と流通手段という機能を担う単一の貨幣によって保持される必要がある。しかし他方、一定の期間にわたり、諸商品に対して購買を求めうる能力を将来に持ち越すという側面は、逆に単一の貨幣を保蔵することによって実現しがたいものとなる。こうしてマルクスが貨幣蓄蔵の基本的契機として重視しようとした過剰性の側面は、市場の無規律性の故に単一の貨幣が一身で担おうとすれば、独自の困難が伴う。そのため現実の市場においては、価値尺度ならびに流通手段としての機能を果たす表層的な貨幣を中心としながら、その周囲に「社会的抽象的な富」としての性格を兼備したいくつかの貨幣的商品が簇生することにならざるを得ない。富の契機を取り込んで成立する無規律的な市場におい

では、貨幣もまたそれ自身一定の内部構造を具えた貨幣体制として分化・適応してゆくほかないわけである。しかもこの貨幣体制はまた、それ自体閉じた領域を有するものではなく、外部の諸商品との間に素材の交替を許す、いわば外圍の帰属の定めがたい直を残す世界であるといつてよい。もともとマルクスには貴金属に言及することで、貨幣素材の複数性を示唆する直がみられたのであるが、この貴金属は捉えようによってはさらに穀物、土地、美術品などの象徴として拡大解釈しうる余地を含んでいるように思われる。そして、そこにまた「社会的抽象的な富」としての性格が、市場においてけつきよく資本という運動を生み出さずにはおかない根因もあるのである、マルクスの貨幣蓄蔵の諸契機を関連づけることで見えてくるのは、まさに商品世界の深部に伏在していた「貨幣性質」一般が分化し再結合を遂げる、複合貨幣への構造化の諸相だったのである。

では以上のような貨幣論の構造は、マルクスの理論体系全体において如何なる位置を占め、またどのような意義をもちうるのだろうか。第一に、おそらくこのような貨幣の把握は、資本主義経済の歴史性に密接に結び付いている点で、決定的な意味をもつといえよう。「商品の貨幣性質」が貨幣に結実してゆく過程は、同時にまた貨幣そのものの諸貨幣への分裂の契機を含んでおり、さらに資本への発展の動力をすでに内包しているとするれば、現実の市場は個々の経済主体が商品経済の論理のみに従って行動したとしても、それだけでは必ず単一の市場一般に収斂するとばかりは言い切れぬ面を残すことになる。たしかに市場のうちには、商品、貨幣、資本といった独自の形態を生み出す一般的な動力が内在していることは疑いえない。しかしそれは多様な個性を内包した、いわば種としての一般的なものであり、現実の市場は、おそらく社会的生産に作用し反作用をうける過程を通じて、歴史的に様々なかたちに変容するほかない存在であるということになる。商品、貨幣、資本の諸形態の間で、交換性とそれをとりまく過剰性との関係が、一定の幅で流動しうるとすれば、そこには、これらの形態によって構成される市場が、同時にまた歴史を容れうる形態でもあることが開示されているとみることができるのである。

第二に、マルクスの貨幣論に潜む以上のような構造化の視角は、市場が交換性を軸とする可視の領域と同時に、富の世界を包蔵することに由来する不可視の領域を併せもっている点を浮かび上がらせることになる。このことは、例えば貨幣に関する管理といった問題を考える場合、おそらく重要な意義をもってこよう。歴史的に特有な個性をもって登場する諸市場は、単に社会的生産一般の発展との関わりにおいてその多様性を説明しうるだけではなく、また政策当局の意識的な統御のあり方によっても左右される面のあることは否定できない。そしてこうした統御の有力な手段とされるのが、貨幣に関するさまざまな管理であったこともたしかである。しかしその際、この管理の対象となりうるのは、あくまでも先の可視の領域に限定されるのであり、不可視の領域を含む貨幣体制全体が、直接に統御可能となるわけではない。こうした政策的な介入は、むしろ流通手段機能を果たす通貨を購買力の保持という契機からますます乖離させ、そうすることで交換の世界と富の領域との懸隔を逆に拡大し、ある意味で意識が無意識の世界を統御できなくなる

のに似て、貨幣体制を全体としてい。そう無規律なものにする可能性を秘めているように思われる。マルクスの時代、貨幣商品金は不可視の契機に深く浸透し、交換性の世界に過剰性一般をなお強力で糾合し得ていたといつてよい。その後たしかに、この金貨幣は可視の領域で事実上本位貨幣の地位を喪失し、管理された通貨に代位されることになったのであるが、しかしこのことは本来の貨幣蓄蔵を軸にする不可視の領域でも、金がその地位を剥奪されたことをただちに意味するものではない。むしろマルクスの貨幣把握を踏まえてみれば、不可視の領域においては、金を含めてより複雑な構造化が進行し、管理された通貨が管理し得ざる貨幣商品群によって困統されるようになったというほうが正確なのである。

こうしてみると、一〇〇年あまり前にマルクスが古典派経済学批判を通じて築いた独自の貨幣把握のうちには、今日の観点からみてもなお興味深い論点が蔵されていることに気付く。マルクスが示唆していたように、市場のもつ多様なあり方を歴史的な視座から論定することなく、その合理性一般を云々することはできないであろう。もしある市場が相対的に社会的生産を効率的に編成・処理し得ていたとすれば、そこでは商品、貨幣、資本の間に市場の担うべき諸契機がそれぞれどのように配置されているのか、この点が背後の社会的生産との関わりも含めて、明確にされなければなるまい。市場の多様性を歴史的観点から統一的に捉えるこのような方法は、現代の資本主義経済における複雑な貨幣現象の意味を理解するうえで欠かせないというだけでなく、さらに社会主義経済のもとにおける市場の意義を考える際にも、絶えず念頭におかれるべき点なのである。

- (1) A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations*, (ed.) E. Cannan, 1950, p. 25, 大内兵衛・松川七郎訳、岩波文庫(1)、一九五九年、一三五頁の略記。以下、本書の該当箇所は同様の方式で示す。
- (2) K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie, Marx-Engels Gesamtausgabe*, II/2, 1980, S.156, 武田隆夫ほか訳、岩波文庫、一九五六年、一〇三-一〇四頁の略記。以下同様。
- (3) K. Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857/58, Marx-Engels Gesamtausgabe*, II/1-1, 1976, S.57, 『資本論草稿集』I、大月書店、一九八一年、八一頁の略記。以下同様。
- (4) 『経済学批判』では、同様の観点からするグレイ批判が展開されている。Kr.S.157, 訳一〇六-一〇七頁。
- (5) マルクスの「本源的購買貨幣」批判の主軸は、その後『資本論』第一巻を締めくくる位置におかれた「蓄積論」に移されてゆく。『要綱』の貨幣の章においても、マルクスはすでに「ブルジョア社会の基本的前提は、労働が直接的に価値を生産すること、したがって貨幣を生産することであり、次には貨幣もまた直接的に労働を購買すること」である(Gr. S.149-150, 訳二四九頁、なおS.160, 訳二七一頁も参照のこと)と述べ、賃労働が「労働による購買」を「貨幣による労働の購買」へ転倒させるものである点を示唆していた。この点が後に、自己労働に基づく所有から他人労働に基づく所有の発生を説く、いわゆる「領有法則の転回」論に拡充され、スミス批判の主眼に据えられることになるのである。
- (6) D. Ricardo, *On the Principles of Political Economy and Taxation, Works and Correspondence* I, (ed.) P. Sraffa, p.47, 『リ

- カードウ全集』I、雄松堂書店、一九七一年、五三頁。
- (7) とりあえず宇野弘蔵『経済学方法論』、東京大学出版会、一九六二年、IV-1「価値論の論証について」をみられたい。マルクスの労働価値説に対しては、『資本論』第一巻の公刊直後からバーム・バヴェルクラによって、冒頭商品論におけるいわゆる蒸留法は「積極的論証」たり得ないとする批判が繰り返されてきた(宇野『価値論』、青木書店(再刊)、一九六五年、序論III)。これに対して宇野氏は、マルクスがあらゆる社会の基礎をなす労働生産過程を市場の形態論的考察の後に位置づけて展開したことを高く評価し、この方法を基礎に『原論』体系のうちに労働価値説の「積極的論証」を埋め込む作業を進めてゆくことになる。宇野『経済学方法論』、岩波書店、一九六四年、第二篇第一章第一・二節を参照のこと。
- (8) K.Marx, *Das Kapital I, Marx-Engels Werke*, Bd.23, 1964 S.109, 岡崎次郎訳、国民文庫(1)、一九七二年、一七一頁の略記。以下同様。
- (9) この二つの引用文のうち前者は、宇野氏がマルクス価値論の積極面を示すものとして再三論じたものである(『経済学方法論』、前掲、二〇一頁、『原理論の研究』、岩波書店、一九五九年、一二六頁など)。そこには、本来、商品の価値なるものが現実に購買を繰り返されるなかで、いわば変動と分散を含む価格帯として発現せざるを得ない性質を本質的に抱えている点を理論的考察の域外に放逐し、価値の概念を、基準点にせよ個々の価格にせよ、ともかく一点に還元してしまう立場を鋭く批判する視点を読み取ることができるのである。宇野氏の価値論は(7)でみたように、一方で労働価値説の「積極的論証」を自らの責任において『原論』体系のうちに組み込んでゆくと同時に、他方では実際の価値現象のこうした側面を捉えることのできないバーム・バヴェルクラの価格理論に対して、マルクスの価値形態論の立場からする積極的批判を企図する面を具えていると解することもできよう。
- (10) 久留間敏造氏はこの「非流通手段」という規定に基づき、铸貨準備金の内容は流通手段の規定で尽きるとする竹村脩一氏に対して、「铸貨準備金は流通手段ではない」とする解釈を与えている。しかし他面では、「铸貨準備金についての立ち入った考察を『貨幣蓄蔵』を主題とする項目のなかで行ったことは、そうすることが理論的に必然であったからだとはいえない」という(「貨幣蓄蔵をめぐる」、『マルクス経済レキシコンの葉』No.12、大月書店、一九八二年、八～九頁)。たしかにマルクスの場合、「非流通手段」として括られた铸貨準備金と蓄蔵貨幣の内的なつながりが明示的に述べられているとはいえない。しかしそうだとすればなおのこと、ひとまず否定形で押さえられたこれら諸契機間の関連が、マルクスの議論を踏まえつつさらに理論的に詰められる必要があるといえよう。
- (11) 流通の外部に引き上げられるという基準では、兌換停止下における铸貨準備金と本来の蓄蔵貨幣との区別は困難になる。この点から遡って、マルクスの铸貨準備金の規定を貨幣蓄蔵に含めるか否かを巡り、一連の論争がおこなわれてきた。例えば龍健一『不換銀行券論』、青木書店、一九六七年、第七章をみられたい。
- (12) この点に関して、ローゼンベルグは商品経済の発展とともに、第二の契機が後退し第一の契機が軸になってくるのだと述べ、第二の契機の非近代性を指摘する。このように捉えるならば、事実上古典派が第二の契機を野蠻の産物として清算したことを基本的にはそのまま追認することになろう。Д.И. Розенберг, *Комментарии к первому тому "Капитала" К. Маркса*,
- Моспоч, 1961, стр. 146, 副島種典ほか訳『資本論注解』1、青木書店、一九六二年、二〇二頁。
- (13) たとえばヒルファアーディングなども、いわゆる「組織された資本主義」論の伏線として、議論の出発点においては逆に「商品生産社会の無政府性(Anarchie)」を強調する(R.Hilferding, *Das Finanzkapital*, Europäische verlagsanstalt, 1968, S.36, 岡崎次郎訳、岩波文庫(1)、一九八二年、三七-三八頁)。しかし彼の場合、この無政府性は市場自体の特性としては捉えられず、専ら意識的組織による規制を欠く無計画的な生産の単なる反映と見なされるのである。そこには無政府性の物的基礎に貨幣蓄蔵の存在を据えることのできなかった商品世界に対する基本的認識の欠陥が露呈しているように思われる。このように市場における無政府性を、社会的生産関係に密着させるヒルファアーディングの理解は、一定の原則的な必然性をもって繰り返される社会的物質代謝の基幹部分を反映する「流通の最小限については、この無政府性が、いわば排除されている」(A.a.O., S.41, 前掲訳四六頁)という認識を容易にもたらすことにもなる。すでに触れた宇野氏の独自の価値論が、価値形態論の課題を市場そのものもつ無規律性の解明におくかたちで、ヒルファアーディングのこの一文を根拠から批判する方向において形成されていたことは銘記される必要があろう。宇野『貨幣の必然性』一九三〇年、『資本論の研究』、岩波書店、一九五九年所収、七七頁参照。
- (14) この点とはやや別の角度においてだが、マルクスのなかには貴金属とくに金の価値の安定性を博物学的・技術学的な観点から強調し、この属性を「経済的比重」の大きい点、任意可分性、等質性、耐久性等とともに、貨幣素材の要件のIつに数える側面がある。すなわち、金の場合にはそれほど「生産諸力の発展を必要としない。自然がその大部分の作業をする」(Gr. S.112, 訳一七二頁)というのであり、これに対して銀では採取と精錬の過程が相対的に大きい結果、生産諸力の発展につれて、金銀比価がますます開くようになると述べ、この点を金が世界貨幣の地位を占拠するようになる一つの原因に挙げている(Kr.S.216・17, 訳二〇六頁)。
- (15) この法令に関しては、長期的な価値尺度としては現実の金属貨幣よりも穀物のほうが適しているという点を強調する立場から、すでにA・スミスが着目している。WN, p.36・37, 訳(1)一五九～一六〇頁。なお、マルクスは『要綱』においても、このシーニョアの見解について触れ、そこでは「諸契約で現れるような貨幣としては、変動は本質的なものであって、一般に貨幣の諸矛盾はこの規定において現れてくる」(Gr. S. 159, 訳二六八頁)と述べ、貨幣価値の変動が貨幣の諸機能に対して異なった影響を及ぼす可能性のある点を事実上示唆している。
- (16) さらにマルクス自身が全面的に校閲した、一八七二/七五年のフランス語版では、おそらく当時のフランスの事情を慮ったことであろう、「本書ではどこでも」という一般化の文言が削除されるとともに、「金(または銀)」が「貴金属」に、また「金の蛹」が「金または銀の蛹」と改められる等、こうした傾向はさらに徹底しているように思われる(*Le Capital*, traduction de M. Roy, Éditions Sociales, 1978, p.104, p. 135・36, 江夏美千穂ほか訳『フランス語版資本論』上、法政大学出版局、一九七九年、七一頁、一一〇頁)。フランスにおける金銀複本位制の追求に関しては、さしあたり新庄博『貨幣論』、岩波全書、一九五二年、第四章四を参照されたい。